所報
No.126
平成30年10月16日
富山県総合教育センター　富山市高田525
E-mail:center@tym.ed.jp（代表）
URL:http://center.tym.ed.jp/

目　次

●暑さに負けず熱く …… 1
●夏の研修を振り返って …… 2・3
●センター事業より …… 4
●まだ六か月も残っている… …… 5
●随想 …… 5
●連載「知って得31」 …… 6

暑さに負けず熱く

今年度7・8月にセンターで研修された先生方は延べ8,900人あまりでした。酷暑の中、資質向上のために取り組む姿を各部から紹介します。

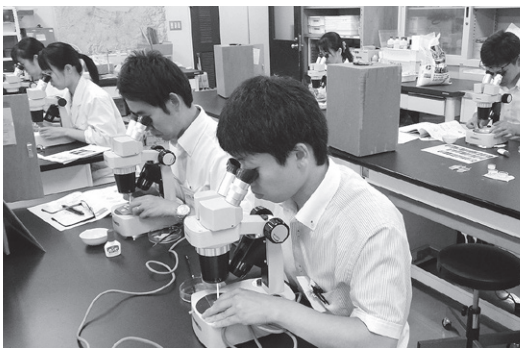
教育研修部

保育技術協議会　7月25日
講話と演習「幼児の見取りと瞬時の対応」

外国人児童生徒教育実践講座　7月30日
協議「外国人児童生徒・保護者への対応について」

児童生徒のICT活用の充実と情報モラル研修会
（児童生徒のICT活用コース）　8月1日
「ICTを活用した授業づくりに関する講義」

科学情報部



理科教育講座（実験）高等学校コース　8月2日
「微化石の観察」

教育相談部

特別支援教育講座
（基礎から学ぶ自立活動実践コース）　7月31日
講義「自立活動の指導の在り方とその実際」

保護者との良好な関係づくり　8月6日
講義「保護者との望ましい連携の在り方」

夏の研修を振り返って

教育研修部

平成30年度11年次教職員研修・中堅教諭等資質向上研修〈年次交流研修〉について

―中堅教員として気持ちを新たに！―

8月2日(木)を皮切りに、5日間の日程で10、11年次の先生方と2年次の先生方との年次交流研修が行われました。校種（小・中・高）ごとに5～8名のグループとなり、学級経営や生徒指導等に関して2年次の先生方の日頃の実践や悩みについて話し合い、10年次、11年次の先生方がアドバイスをするという内容でした。

昨年度末に策定された「富山県公立学校の教員等の資質向上のための指標」では、経験年数10年以上の教員を充実・発展期とし、キーワードを<助言>としています。10、11年次の先生方はしっかりと指標を意識し、2年次の先生方の悩みや課題に耳を傾け、自分の経験や研修で学んだこと等を基にアドバイスを送っていました。どのグループも和気藹々とした雰囲気の中で交流が進んでいました。

10、11年次の先生方からは「すぐに答えてあげたくなる気持ちを抑え、相手に気付かせるように話を進めることが難しいと感じました」「笑顔で傾聴しながら相手の思いに共感し、認めたり励ましたりするなど、まずは話しやすい雰囲気づくりが大切だと感じました」などの感想が寄せられました。また、「2年次の先生方の頑張りに、自分も負けずに頑張ろうと思いました」「『助言する』ことを通して自分自身を客観的に見つめるよい機会となりました」など、中堅教員として気持ちを新たにする感想もありました。

助言内容を検討する
10年次、11年次の先生方

グループ別協議での助言の様子

科学情報部

授業力向上のためのICT活用研修会

―ICTを活用して授業を設計しよう―

共通研修

◆**日　時**　平成30年7月26日（木）午後
◆**講　師**　大阪教育大学連合教職大学院
准教授　寺嶋　浩介 先生
◆**演　題**　「ICTを活用した授業設計」
◆**内　容**　文部科学省のデータを基にこれまでのICT活用の進展を報告された。また、学校でどのようにICT活用を広げるか、今後ICT活用に求められていることを話された。ICT活用の具体事例作成の演習を通して、ICT活用の効果やICTを活用した指導の原則を確認された。
◆**研修担当者より**　「他の先生のICT活用をまねて、自分のICT活用事例をつくろう」と話されたことが印象に残った。授業の目的達成のために、まずICTを活用してみるチャレンジ精神が大切だと感じた。

選択研修

◆**日　時**　平成30年7月30日（月）
又は8月2日（木）の一日
◆**講　師**　滑川市内小学校教諭
◆**実践事例報告及び演習**
◆**内　容**　前半は講師が実物投影機を活用した授業事例を行った後、各グループで実物投影機を活用した授業を設計し、全体の前で模擬授業を行った。後半は講師がフラッシュ教材を活用した授業事例を行った後、各グループでフラッシュ教材を作成し、他のグループに試行した。講師から実物投影機及びフラッシュ教材の活用方法と活用する上での注意点をまとめていただき、参加者全員で確認した。
◆**研修担当者より**　講師から「大きく映すと子供は前を向き、学習内容をより理解し、意欲的になる」「何を映して、何と言うか、発問が非常に大切である」などの言葉があった。ちょっとしたICT機器の活用が子供の意欲を引き出すこと、ICT機器の利用だけでは授業が成立しないこと等を理解した上で授業を設計し、実践することが大事だと感じた。

受講者の声

◉ICTは劇的な変化をもたらすイメージがありましたが、それよりも何を映しどう発問するかが大切であることを実感できました。（小学校教諭）
◉どのタイミングでICTを活用すると効果的なのか、ICTを活用した授業づくりは自分の授業を見直すことにつながると感じました。（高等学校教諭）

（受講者32名：小学校13名、中学校4名、高等学校7名、特別支援学校8名）

教育相談部

学校カウンセリング講座（教育相談基礎コース）

― 事例検討を通して児童生徒への支援策を考える ―

演習：対人関係ゲーム「フープダウン」

◆日　時　平成30年７月31日（火）　９：00～16：00

◆講　師　富山大学　人間発達科学研究実践センター
客員教授　田中　親義 先生

◆演　題　「事例から児童生徒理解を深める」

◆内　容

○事例検討は、原因究明が目的ではなく、支援策を策定するために行うものである。原因究明ばかりにならず、しっかりとした見立てから方針・支援策を考え、その見通しと評価というサイクルで対応することが大切である。

○「困った子は、実は困っている子」と捉え、「マズローの基本的欲求」を基に、児童生徒の不適切な言動の原因や背景を考えるアセスメントが大切である。

◆演　習　学級で行うグループアプローチ

○学級集団に合った働きかけ（グループアプローチ）を行うために、アンケートや日頃から担任が感じていることを基に、学級集団の様子を言葉で表現し、学級集団の伸ばしたい力について考えた。また、ゲームを用いた代表的な学級集団への働きかけ（グループアプローチ）を体験し、学級に合った集団づくりについて話し合った。

受講者の声

◉集団づくりについて様々な手法を学ぶことができました。学級の様子を振り返り、2学期に向けて学級に必要なアプローチを考えるよい機会となりました。（小学校教諭）

◉個の持ち味が生き、共に育ち合う学級集団づくりを目指したいと思いました。（中学校教諭）

◉インシデント・プロセス法による事例検討は、問題解決の有効な手段だと感じました。事例検討を通して、生徒への援助を担任一人で抱え込まず、学校全体で取り組んでいきたいと思いました。（高等学校教諭）

特別支援教育講座（読み書き支援コース）

― 読み書きにつまずきのある児童生徒の理解と支援について ―

◆日　時　第1回　平成30年6月7日（木）９：30～16：30（講義）
第2回　平成30年8月9日（木）午前又は午後を選択（講義・演習）

◆講　師　東京学芸大学　教授　小池　敏英 先生

◆演　題　「読み書きにつまずきのある児童生徒の理解と支援について」

◆講義・演習　「つまずきに応じたICTの工夫（ICT等の活用と教材作成）」

◆内　容

第1回　知的発達に全般的な遅れがなくても、読み書きに困難さを抱えている児童生徒は多い。学習障害への対応として、早期からの適切な支援が大切であり、学習性無力感を軽くすることにつながる。講師が作成に関わった「読み書き学習支援のポイント」という小冊子や豊富な研究データを基に、様々な読み書きの困難さについての理解と具体的な支援方法について学んだ。

第2回　第1回の講義内容を振り返り、担当する児童生徒の読み書き困難の背景を考えながらiPadやパソコンの活用法を体験し、パソコンを使った教材作成を行った。

受講者の声

◉資料が豊富で、具体例と結び付けて紹介していただき、必要な支援やその理由がよく理解できました。（小学校教諭）

◉漢字を書けないことにはいろいろな要因があることを分かりやすく説明していただきました。すぐ使えそうな書籍やダウンロードできる教材を紹介していただき、早速明日から使おうと思いました。（中学校教諭）

◉漢字はただ繰り返して覚えるのでなく、イラストやエピソードを用いて記憶していくとよいということが分かりました。特別支援学校で実践できる内容があり、活用していきたいと思いました。（特別支援学校教諭）

センター事業より

新規招致外国青年への富山オリエンテーション

7、8月に来日するJETプログラム招致の新規外国青年（外国語指導助手と国際交流員）は、来日直後に東京で研修を受講した後、それぞれの県に配属されます。その後、富山県では「勤務及び生活に役立つ知識や情報等を提供すること」を目的とし、富山オリエンテーションを開催しています。

日　程　平成30年8月10日（金）辞令交付式(県立高校のみ)及び全体研修、
8月23日（木）地区別研修、8月24日（金）立山研修

受講者　JETプログラム新規招致外国語指導助手27名、新規招致国際交流員3名
8月10日のみ日本人外国語担当教員26名（小学校5名、中学校10名、高等学校11名）

内　容　初日は、ALT（外国語指導助手）の勤務校の外国語担当教員が、学校生活やTT授業について新規ALTにアドバイスをしながら、お互いにコミュニケーションを図る機会となっています。今年は、小学校だけを訪問するALTの数が増えたので、小学校対象のワークショップも開催しました。2日目は、4地区の会場に分かれ、外国青年ができるだけ早く地域や学校の生活に慣れることができるよう、詳しい情報を提供しています。先輩ALTがワークショップのリーダーとなり、新規ALTに情報提供やアドバイスを行うOJTの形も取り入れています。最終日の3日目は、「富山の自然と歴史を学ぶ」というテーマのもと毎年立山研修を行っていますが、今年は台風のため中止となりました。

学校生活について
（先輩ALTからのアドバイス）

ワークショップ内容例

★雇用について　★任用規則について
★ALTの役割について
★小、中、高の学校生活について
★小、中、高の使用教材とTT授業について
★地域との関わりについて　★富山紹介　等

TT授業について
（担当教員からのアドバイス）

サイエンスカー訪問活動

―いきいき笑顔との出会い―

科学情報部では、科学技術教育普及活動の一環として「サイエンスカー訪問活動」を行っています。この活動は、希望する小学校を対象に、理科工作や実験・観察を行うものです。今年度も各種実験機材を積んだサイエンスカーが県内を走り、ユニークな活動を展開しています。

対　象　児童数120名以下の県内小学校
期　間　5月上旬から12月中旬
内　容
（低学年）しゃぼん玉遊び、空気遊び等
（中学年）風船ホバークラフト、熱気球づくり等
（高学年）ぽんぽん蒸気船、化石模型づくり等

しゃぼん玉遊び

熱気球づくり

風船ホバークラフト

化石模型づくり

生徒指導セミナー（第2回）

―子どもの発達・学び・向上心を支える理解、支援、体制―

日　時　平成30年8月21日（火）13：30～16：30
講　師　富山大学人間発達科学部　発達教育学科
和田　充紀 先生
演　題　「通常の学級における特別な支援を必要とする児童生徒への支援の在り方」
内　容
○特別な支援を必要とする児童生徒の数が増加しており、安心できる人的環境と理解できる物的環境をつくることが必要である。
○問題が起こる状況や背景を考えたうえで適切な支援とは何かを考えていくことが大切である。
○児童生徒は何に困難を抱えているかを理解することが支援の第一歩となる。そのために学級・学校の体制を整えていくことが重要である。

受講者の声

◉困難な状況に対しての支援を考えるだけでなく、その背景をまず探り、その後改めて手立てを考えるという手順について参考になりました。（小学校教諭）
◉生徒一人一人の実態をよく把握し、安心・安全に学級で過ごせることを目指し、何ができるかを考えていきたいと思いました。（中学校教諭）
◉発達障害それぞれの特性について学び、対応のコツを具体的に知ることができました。（高等学校教諭）
◉子供の問題行動には様々な背景が考えられるということが演習を通して改めて感じることができました。（特別支援学校教諭）

まだ六か月も残っている…

研修顧問　山﨑　弘一

「今日こそはやらなければならない」と心に決めていた仕事であっても、行き詰まり、嫌になると、つい「明日こそはやろう」と先延ばしにしてしまう。これは、明日を頼んで今日を怠けることにほかならないと分かっているのだが…。今日なすべきことは、明日に延ばすべきではなく、着実に行っていくことが肝要と思っているはずなのだが…。

確かに、物事はやっても出来ないことがあるのだが、やれば出来ることもあるのである。重要なのは、やらなければ絶対出来ないということである。やっても出来ないと思い込み、やろうとしなければ、本当に何も出来なくなってしまう。先ずはやってみることである。やってみて出来なくても決して焦らず、やれると信じて、またやってみることである。

そうこう思いながら、長らく行き詰り、先延ばしにしていた原稿を漸く書き出す…。

途轍(とてつ)もなく大きく強烈な台風が幾度となく襲ってきた今年。気が付けばもう10月。我が家へ向かう道すがら、井戸の中を滑り落ち消えていく釣瓶(つるべ)のように、秋の夕空は消え始める。思わず歩を止め、そして一句「すすき原　釣瓶落としの夕陽かな」と詠んでみる。その時、ふ～っと匂ってきた仄かな香り。手入れの行き届いた庭のずっと奥に、小さな花を咲かせる金木犀。遠くに望む公園には、色づき出した銀杏。肌に感じる冷たい風‥‥、今年11月7日の立冬に向けて深まっていく秋の足音が聞こえてくるようである。

今年度も、あと六か月。もう六か月しか残っていない。何事もつい悲観的に考えてしまう我が性分。「まだ六か月も残っている」と楽観的に考えたいものである。元来、人間は好ましい事が起きる確率を過大評価し、好ましくない事が起きる確率を過小評価するという傾向があるというのに…。年とるごとに、体の箍（たが）が緩み出すことで進む老化についても言えること。確かに、老いはUターンすることのない、前方に進むだけの一方通行。あちらこちらにガタが出てきて当たり前のことなのだが、「もう～しかできない」でなく、「まだ～もできる」と、残った能力の活用を図ることが大切なのだろう。欠けた歯を惜しまず、残った歯を喜び、抜けた髪を憂えず、残った髪を数えるようにしたいものだ。

随想

伝統工芸「唐木家具」に思う

教育研修部長　櫻野　克也

木切れや丸太が川面を流れていくように木が水に浮くのは当然のことと思われています。これは木の細胞中に空気の部分があるからです。しかし、水に沈む木もあるのです。「唐木」です。「唐木」は東南アジアから輸入される高級木材の総称で遣唐使によって唐より伝来したため「唐木」と呼ばれ、邪気を払うとも言われています。中でも紫檀、黒檀、鉄刀木は「唐木三大銘木」とされ、「木のダイヤ」とも呼ばれるほど硬く、重硬で緻密な材質です。将来的には枯渇すると言われており、原産国からの輸出制限になっているものも多いため、とても希少価値の高い貴重な木地なのです。唐木細工は仕上げの表面が美しく装飾性に優れているのが特徴で、正倉院等寺社仏閣の装飾材として、古くから使われてきました。貴族の調度品としても用いられ、釘等の接合道具を使わずに「ホゾ組み」と呼ばれる木と木の組み合わせだけで製作され、高度な技法が施されてきました。

先日、ある古民家を訪問した際に、日本の伝統工芸のひとつである唐木家具に出会いました。彫刻を施し、重厚で格調高い雰囲気の中に、その唐木を生かす職人技が光っており、まるで生きているような滑らかな表情でした。百年から三百年という長い年月をかけて成長した唐木に千年以上の歴史を持つ日本の伝統技法が加わり、深い味わいのある光沢と感触をもつ「家具の王様」が生まれていました。時が経つごとに愛着と存在感が生活の中に生まれて、人が集まる場所で落ち着きのある華やかな空間を創り出し、来客をもてなしてくれているようでした。

現在の生活様式に沿うように工夫し、日本の伝統工芸の魅力を、是非、後世に伝えてほしいと思っています。

連載　知って得 31

理科の
ちょっといい話

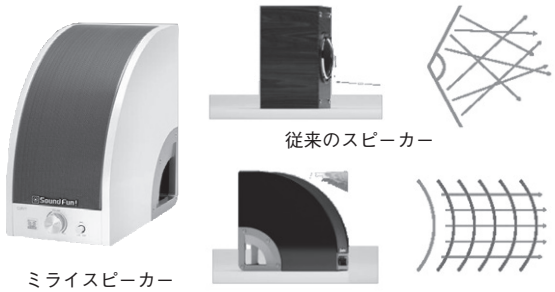
ミライスピーカーを知ってますか？

科学情報部 主任研究主事　寺崎　清光

最近、注目を浴びている「ミライスピーカー」というスピーカーをご存じですか。

先日、ガイアの夜明けというテレビ番組で、定年退職した元音響関係の技術者集団が立ち上げたベンチャー企業が、スピーカー100年の歴史を変えると言われるこのスピーカーを開発し、急成長していることが取り上げられていました。

ミライスピーカー開発のきっかけは昔ながらの蓄音機にありました。音楽療法を手がける大学の先生から「難聴の高齢者は、通常のオーディオ用スピーカーより蓄音機のほうが聞きやすい」という話を聞き、蓄音機の金属管の曲面に秘密があるのではないかと直感し開発に至ったそうです。



従来のスピーカー

ミライスピーカー

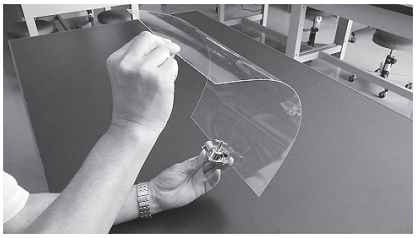
ミライスピーカー

※写真（株）サウンドファン　ホームページより

このスピーカーの特徴は、10m離れても音量があまり変わらず、しかも遠くの音や声を聞くときとは明らかに違う明瞭さを保つことができます。音源から離れれば音が小さくなるという常識を覆したスピーカーなのです。

ミライスピーカーが普及すれば、74歳以上の高齢者の4割が悩んでいるという“聞こえ”の悩みを解消できるだけでなく、人が沢山集まる場所での案内放送、広告パネルからの情報発信等、利用方法はまだまだ考えられます。既に羽田空港や西武鉄道では案内放送として使われています。また県内では北陸銀行の発券機に使われているそうです。今度、北陸銀行で聴いてみてください。

家でTVを見ていると、妻から「もう少し音を小さくしてくれないか」と言われるようになり、“聞こえ”の悩みは、我が家にも迫ってきています。ミライスピーカーの普及を一番望んでいるのは、私なのかもしれません。



オルゴールとプラスチック下敷きで
試してみた簡易デモシステム

教育相談
連　載

やりたいからやる

教育相談部　客員研究主事　舘野　智子

猛暑の名残りか、何となくやる気が出ない日があります。とりあえず、朝軽くヨガをするとスッキリさわやかに出勤できます。それでも気分が上がらない時は、「ケーキを買って帰ろう」と決意します。

活動への意欲を引き出し、維持する過程や機能のことを、心理学では「動機づけ」といい、内発的なものと外発的なものがあります。内発的動機づけは、自分の内側から湧き起こる興味や関心が基になっています。「やらなければならないからやる」ではなく、「やりたいからやる」。これが特徴です。外発的動機づけは、外側からの報酬や賞罰などが刺激になりやすい。「お金が欲しいから働く」とか、「ダイエットのために走っている」といった感じです。内発的動機づけは、活動そのものが目的になり、外発的動機づけは目的のために活動することが多くなります。

カウンセリングで、「ゲームなら何時間でも集中するくせに、勉強は30分も続かない」とわが子を嘆くお母さんがいっぱいいます。ゲームは、楽しくて仕方ないでしょうから簡単には止められませんし、快感が次なる意欲を引き出します。試験で良い成績を取るために勉強する場合は、終われば勉強しなくなるし、覚えたことも忘れてしまいやすいのです。日々の生活の中で、「やりたいからやる」ことの割合が増えると、自分を飾ることなく、自由に好きなように生きている実感がもてそうですが、一方で、「やらなければならない」ことも多く、大人も子供もそうとばかりは言っていられないのが現実です。

ある起業家の言葉を思い出します。「私には夢や目標がありませんでした。相手の求めに徹底的に応えようとしてきただけ。そうすることで変化していく自分を楽しんでいます」。元々仕事に意欲的な人だったのでしょうか。それとも、半ば嫌々働いていたのに、「意外に楽しいかも」という感情が湧いたのでしょうか。あれこれ考えていたら、やることがあること自体幸せだと思い至りました。